

戦争ってどんなもの？

—鈴鹿市の過去と今を生きるわたしたち—

1. はじめに
2. 平和学習のとりくみについて
3. 成果と課題
4. おわりに

三重県教職員組合

井島 達哉 (イジマ タツヤ)

鈴鹿市立牧田小学校

今次教研で論じられた内容と今後の課題

今次三重県教研では、計6本の報告書で3つの柱にそって討議がおこなわれた。討議の内容や助言・課題も含め、以下にまとめる。

(1) さまざまな教材をいかした平和教育

南勢志摩支部からは、昨年度今年度と第3学年を担当し、子どもたちが戦争や平和に対する意識がどのように変化しているか考える機会を設け、平和の大切さや戦争の悲惨さを学ぶ入り口となるよう戦争を題材とした絵本の読み聞かせから、感じたこと大切だと思ったことなどを発表しあう実践報告があった。戦争のつらさを知るとともに、平和のすばらしさを感じてほしいという報告であった。

伊賀名張支部からは、名張市のグループ研究会における平和教育についての報告があった。教員自身の平和に関する知識や引きだしを増やす活動の一つとして元教員の方を招き、この方がシンガポールの図書館を訪れたさいに見た、第二次世界大戦中に日本に占領されていたシンガポールの資料から、「戦争に関わる話をするときは、加害・被害のどちらの立場もあることを忘れないようにすることが大切だ」という報告があった。また、語り部を招く際に重要なこととして、「必ず教員が事前に話を聞くこと」「子どもたちにどんな話をしてほしいかを教員がはっきりと意思をもっておくこと」をあげ、平和教育について学びを深めたり、平和について考えることのできる教材や話題を増やしたりしていくことが大切である報告がなされた。

討論では、個に応じた児童生徒に対応する今日の教職員の多忙業務のなか、どのようにして平和教育をおこなっていくかについて課題が出された。また、SNSを自由に見聞きできる環境の子どもたちは自分のすきなものだけを見ていることが多く、多種多様な情報をえることが容易でないという課題が出された。そのため、年齢・発達段階に応じて計画的に平和教育をすすめていくことが必要などの意見が出された。

(2) 地域や語り部から学ぶ平和教育

津支部からは、戦争と平和を題材にした絵本の読み聞かせ、戦争体験者として自身の体験を語りつなぐ語り部の方との出会い学習、国語科「ちいちゃんのかげおくり」(光村図書)の学習を通して、命の尊さや平和の大切さをあらためて考え直す実践報告であった。「津平和のための戦争展」実行委員会をしている方に来校していただき、その方のご家族は赤紙が来てから何度もあいさつの練習をしたが、いざ出征のときに一言も言えなかったという実体験を話してくれ、「津でも戦争があったと初めて知った。戦争はだめだという気持ちが強くなった」という感想の報告があった。

鈴鹿亀山支部からは、登校日の「平和学習」をきっかけに、総合的な学習の時間に「平和学習」をおこない、日本の戦争について知るとともに、自分たちの住んでいる鈴鹿市でも戦争があったことについて学習した報告があった。学習では学習支援動画を視聴したり、戦争当時の子どもたちのようすを調べたりしたものをまとめ、交流した。子どもたちは「生きていくだけでもたいへんな戦争は二度としたくないと思った」、平和のためにできることとして「戦争のことをたくさん調べ、たくさん戦争のことを知る。戦争を繰り返してはいけないことをみんな

に伝えていく」などという感想をもったという報告があった。

討論では、自分たちの地域に学習教材があることは本当に貴重なことで、子どもたちの方が教員よりもよく知っている場面では、子どもたち主体で授業がすすめられていくことがとても素晴らしいという意見が出された。児童生徒たちのなかには外国につながる子どもたくさんいて、さまざまな国の戦争問題をあつかう際は十分に配慮してすすめていく必要があると確認された。

(3) 学校における平和教育活動の位置づけ

三四支部からは、「戦争を知らない世代の考えや行動」から平和学習をすすめた実践報告があった。報告者自身が大学生のときから携わっている広島とうろう流しをとりあげ、慰霊を中心とする式典および世界の平和を考えメッセージを発信する場であることを伝え、観光としてみる立場・平和学習として見る立場で、立場のちがいや立ち振る舞いを考えさせる報告があった。

松阪多気支部からは、教科担任制、読書活動担当としてできる平和教育をとりあげ、第5学年国語科「たずねびと」(光村図書)の教材から「戦争はおこってほしくない」だけではなく「平和な世をどうしたらつくっていけるか」という視点を子どもたちにもたせ、平和図書コーナーを作り広島や長崎の原爆投下や東京大空襲について関連図書を置き、子どもたちに興味関心をもたせるとりくみの報告があった。国語科では、絵入りの自作のワークシートで戦争があったころをイメージしやすいようにし、少しでも自分ごとと考えてほしいというとりくみであった。

討論では、多くの人が戦争で被害を受けた地域を訪れるきっかけが観光であったとしても、戦争・平和について考える機会となってほしいという話が出された。また、戦争をおこさないために自分たちができること、例えば選挙・伝承・地域学習など子どもたちからこれらの考えが出されるような学習になると平和学習はさらに深まるのではないかという話し合いがなされた。

成果と今後の課題

学校における平和教育活動をどのようにすすめていくかについて議論があった。助言者からは、さまざまな立場をふまえ、子どもたちにとってよりよい平和学習にするためには、被害・加害・加担・抵抗の4つの視点を大切にしながらすすめていくことが確認された。また、子どもの日常の平和(人権保障)を大切にすること、子どもの学びたいという気持ちを高めようと考えること、「希望」「展望」をもたせることを大切な観点として、教職員自身が、学びつづけ仲間を増やししながら、視野のひろい平和学習をめざしてほしいという提言もあった。

第73次県教研 司会者 疇地 千加子

1. はじめに

第二次世界大戦が終結してから 79 年が経過した。この長い年月のなかで戦争の影響を受けた人々や国々は、平和の維持と促進にむけてさまざまな努力をつづけてきた。日本においても、戦争の惨禍を繰り返さないために、平和教育は重要な役割をはたしてきたといえる。一方で、戦争を経験した世代が減少し、戦争を直接知らない世代が増加していく世の中において、戦争の悲惨さやその教訓をどのように次世代へ継承していくかが課題となっている。

本実践にむけた事前学習として、夏休みの登校日に「平和について考えよう」をめあてとし、日本の戦争の歴史の動画視聴と、教員のヒロシマ平和行動での体験談を聴く時間を設けた。教育用動画サイトの戦争に関する特集のなかから、いくつか動画を見せた。太平洋戦争のようすや戦争当時の暮らし、子どもたちの暮らしをはじめ深く知った子どもたちからは、「戦争はほんとうに恐ろしいものなので、二度と起こらないようにしていきたい」「戦争のときの暮らしは、今とは全然ちがって自分だったらいやだと思った」「苦しい生活をしていただけだった」といった反応があり、戦争を自分と遠い過去の出来事だと認識していることが分かった。また、教員のヒロシマ平和行動の体験談を聞いたあとは、「今も平和祈念式典などがおこなわれているのは、戦争のこわさを忘れないため、平和への思いを受けつぐためなんだと知った」「自分たちと同じような子どもたちが堂々と話していてすごかった。自分も何かできることがあるのかなと思った」などという声があり、現在の平和へのとりくみについて知ることができたようだった。

このような子どもたちのようすから、「戦争の背景や経緯を知ること」「戦争を身近に感じさせること」「平和を持続、実現していくために自分たちにできることを考えさせること」が必要だと感じたため、5 年生 3 学期の総合的な学習の時間に平和学習をおこなった。

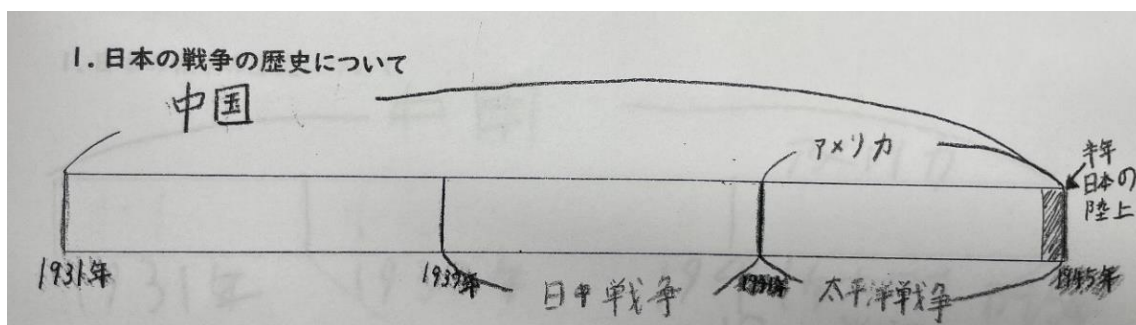
2. 平和学習のとりくみについて

登校日の平和学習をきっかけに、第 5 学年の総合的な学習のとりくみのなかで、平和学習をおこなうこととした。日本の戦争について知るとともに、自分たちの住んでいる鈴鹿市でも戦争はあったのかということにつなげ、平和学習をすすめていった。

1 時間め：日本の戦争の歴史を知る

登校日の平和学習で、「日本でも戦争があり、広島と長崎に原子爆弾が落とされた」という事実は理解しているが、その背景や経緯については理解していないことが分かったため、日本の戦争の歴史の全体像について把握する機会として、1931 年から終戦までの年表を作成した。「何がきっかけで、どこの国と戦争になったか」「どのくらいの期間、戦争がつづいたのか」「日本が戦場になったのはいつ・どこでか」などを確認しながら年表にまとめさせた。また、日中戦争・太平洋戦争と国民生活に関連する教育用動画サイトの動画を視聴し、戦時下の暮らし、戦争の悲惨さをイメージさせながら学習させた。

子どもがまとめた年表



～授業後の感想～

日本が戦争をはじめたきっかけになっていたことが分かった。戦争のせいで、子どもまでもが働かされていることが分かった。

大不況のとき、しんりやく以外の国内復活の方法はなかったのかなと思った。子どもからこうれい者まで戦争にかかわっていたと分かった。戦争は悲しみしか生まないのに人類はそれをやめられないのだろうか。国内復活のためにせめたのに国内はあっかしていた。

日本がかかわっている戦争は2年くらいかと思っていたけど、15年も戦争があったとはじめて知った。

戦争のために子どもまでもが働いて、ご飯もそまつなものばかりだった。わたしたちは働いていないし、ご飯もおいしいものを食べている。今だったらありえないことばかりでした。

2時間め：鈴鹿市の戦時中の軍事施設の様子を知る

1時間めに、日本の戦争の歴史や背景について学習したが、より身近なものにするために、自分たちが住んでいる鈴鹿市が生まれた経緯や軍事施設について学習した。まず、鈴鹿市は、1942年に軍が主導となり、海軍工廠を中心とした町づくりをすすめるために誕生した市であることを確認した。次に、鈴鹿市は軍都と呼ばれ、市の11%を軍の施設が占めていたこと、さまざまな軍事施設があったことを写真や動画を用いて確認した。そして、市内のいろいろな地域には掩体や弾薬庫などの軍事施設の一部が今も残っていること、軍事施設の跡地が工場や学校、商業施設等に変ったことも確認した。

～授業後の感想～

鈴鹿市は戦争とかかわっているとは知っていたけれど、戦争のためにつくられていて、とても戦争とかかわっていたのがびっくりした。自分の住んでいるところも工場とかがあって武器を作っていると知った。

鈴鹿市が生まれたけいいや目的が知れた。鈴鹿市と戦争に深い関わりがあることが分かった。当時鈴鹿市は、軍事施設が大量にあったと分かった。

鈴鹿市には戦争にかかわる建物が多くあり、今も戦争を忘れないように建物を残していることを知った。掩体のこと、気象兵がいたことも知って、そんなものがあったのかと思った。

軍事施設はいろんなところにあるけど、鈴鹿市にも戦争の施設はいっぱいあるのが分かった。

3時間め：鈴鹿市の空襲や当時の子どもたちのようすを知る

登校日の授業で、「広島と長崎に原子爆弾が落とされた」ということは、多くの子どもが知っていたが、鈴鹿市の戦争の被害については多くの子どもが理解していないということが分かったため、鈴鹿市内の空襲のようすや勤労働員のようすについて書かれた文章を読んだり、勤労働員に関連する教育用動画サイトの動画などを視聴したりし、身近なところで空襲があったこと、子どもたちが戦争に影響を受けたくらしをしていたことを学習した。

～授業後の感想～

戦争のときは、学校に行っても勉強はできなく仕事をしていたこと、この近くでも空襲が鳴り響いていたことを知った。そのときに生きていた子どもたちは、戦争に苦しめられていて、今の自分たちが戦争を起こさないためにも努力していきたい。

空しゅうが近くであったことを知った。地しんのゆれとまちがえるくらいすごいしんどうでそれだけ強力なもの。

毎日のように空しゅう警報が鳴り、防空ごうに入って、真っ暗ななかで過ごしていたと思うと今ではとてもありえないことだと思った。子どもたちは勤労働員をしていて、大きい工場でいつ爆弾が落ちててもわからないというなかで、覚えが悪いと殴られると思うととてもこわくなった。今でも戦争をしている国があるから、このような生活をしていると思うと、わたしだとたえられないと思った。

戦争の話聞くだけでどれだけこわいかおそろしいのかが分かった。自分たちと同じような年齢の子が働いていたりしてて、自分だったらこんなことができないと思う。

4・5時間め：当時の子どもたちのようすを調べ、まとめる

3時間めまでの学習を終え、当時の世のなかや子どもたちのようすについて、今とのちがいに驚き、関心をもつ子どもたちが多くいた。そこで、当時の子どもたちのようすを「衣・食・住・遊び・学校のようす・家庭でのようす・その他」などテーマを決め、調べ学習をおこなった。

これまでの学習で子どもたちからは、「今とのちがいが大きそうだからこれについて調べてみたい」や「昔は食べ物とかを自由に買えなかったらろうから、今と食べているものもちがうのか」などの声があがっており、本やインターネットを活用しながら意欲的に調べ、まとめている姿が見られた。

子どもの作成した資料の一部

テーマ：戦争当時のご飯

昔 きちょうひん
お米は貴重品で、普段はじゃがいもやすいとん
 (小麦でできた団子)、かしわ柏の葉 (柏餅の葉)、かしわもち里芋な
 どを食べていた。

《写真》
 ・すいとんを入れた汁物
 ・じゃがいもなどでかさ増した米
 ・たくわんのようなもの
 ・さつまいも
 ・みそ？

例→

食べ物の写真

食べ物の写真

テーマ：戦争当時の遊び

昔
 ・戦争ごっこの代わりに、おもちゃも戦車や飛行機などと戦争に関係するものが増えた。
 ・また、すごろくゲーム、かるたも戦争の内容をあつかったものが増えた
 ・外での遊びは、大縄跳びや野球などの遊びをしていた。

当時の遊びの写真

〈すごろくゲーム〉 〈大縄跳び〉 〈野球〉 〈戦争ごっこ〉 〈かるた〉

戦争当時の食べ物？

昔
 ・配給された米や、代用食としてじゃがいも、さつまいも、小麦、大豆を食べていた。
 ・自宅の庭や空き地、道路わき、ビルの屋上などを耕して野菜を作っていた。
 ・米を食べるときには、米がふやけてしばらくの間お腹いっぱいになるので、おかゆや雑炊にして食べていた。

配給の写真

テーマ：戦争中の服装

昔★衣
 戦争中の服は茶色っぽい色。頭を守るために地震のときに使う防災頭巾をかぶっていた。昔は防災頭巾のことを「防空頭巾」と呼ばれていた。水に濡らして燃えにくくしていた。昔は好きな服も着られなかった。男の人は「国民服」、女の人は「もんぺ」をはいていた。
 もんぺは足首のところがしぼってあつて動きやすい。戦争中女の人はみんなはいていた。

【もんぺ】 【防空頭巾】

当時の服の写真

【服装】

もんぺの写真

防空頭巾の写真

今
 ・滑り台やブランコなどの遊具で遊んでいて、ボールを使った遊びが多く、みんなで遊べる鬼ごっこやかくれんぼなども多くなっている。
 ・他にも家の中で遊んだり、どこでも遊べるゲームなどで遊んでいる人が多い

遊びのイラスト

テーマ：★今と昔の違い★

国民服の国民服
 昔
 服装は、男性が国民服で女性がモンペを着ていました
 食べ物は、「さつまいも」、「じゃがいも」、「もち草」、「すいとん (群馬の郷土料理)」、「草履 (そうかく)」、「柏の葉」、「里芋やかぼちゃなどの葉や茎」まであらゆるものを食べていました
 遊びは、戦争が始まると戦争に関係あるものの遊びが増えたり、変わっていきました
 例えば、「チャンバラごっこ」は「戦争ごっこ」に変わりました
 おもちゃは戦車や軍艦、飛行機が増えました

国民服

もんぺのモンペ
 写真

食べ物の写真

6 時間め：当時子どもたちのようすを調べたことを交流する

4・5時間めに調べ、まとめたことを交流した。友だちの発表を聞くなかで、今の生活とのちがいをあらためて理解し、驚くようすが見られた。また、子どもたちからは「これについてもっとくわしく調べてみたいな」「これも気になるな」という声も聞こえてきた。

～授業後の感想～

昔は、国全体が戦争があたり前になってなにもかもがこくなことになっていった。生きていくだけでもたいへんな戦争はもう二度としたくないと思った。学校もかこくで、いろいろ戦争のためのことをしていたと分かった。

食べるものも着るものも学校生活も、すべてが現在とは全くちがうくてびっくりした。お金もちの人は何をしてもいいと思っていたけど、お金持ちの人でも高級な米を弁当に入れていたら「非国民」と言われると知ってびっくりした。

戦時中と今の暮らしでは、大きくちがいがあると分かった。食料は今ではあたりまえ、でも戦争のときはあたりまえではないことをした。だから、食料にはかんしゃをし、あたりまえではないというのをわすれないでいく。

今の生活とは全くちがう生活をしていたと分かった。授業もすべて戦争関係の勉強をしていて、昔は戦争のために生きているみたいだと思った。食べ物も決められていて、好きなものを食べられなく、量まで決められていた。とてもつらかったと思う。

7時間め：今の自分が平和のためにできることを考え、交流する

今までの学習から、戦争の恐ろしさ、当時の生活のたいへんさなどを実感したようすであり、平和への思いが高まったように感じた。そこで、今の自分にできることは何か、クラスで何をしていたらよいかを考え、交流する時間を設けた。

子どもが考えた平和のためにできること

まずは自分たちが戦争のことについて調べて戦争の恐ろしさとかどうなったら戦争になるのかとかを調べて戦争のことについて詳しくなる。小さな争い（物の取り合いとか押し合い、叩いたり、いじめたり、暴力）などそういったことを一切せずみんなが安心して過ごせるようにする。

今の自分ができること

- ・誰とでも仲良くする
- ・戦争当時のことについて知る。（暮らし、学校、など）



- ・戦争のことについて、周りの人に伝える・教える。（もう同じことをしないように）

【戦争をなくしているために今の自分にできること】
みんなが戦争をもう二度と繰り返さないという意味を持つ。自分が戦争のことなどをたくさん調べてたくさん戦争のことを知る。戦争は繰り返したらいけないことをみんなに伝えていく。生まれた国に関しての差別に対して許さない心を持つ。この国に生まれたからにはもう同じ過ちをおかさないようにする努力をする。

〈平和が続くために〉

- ・暴力をしない
- ・戦争を経験した人の話を聞いて、それを次の世代へ語り継いで戦争の恐ろしさを忘れない取り組みをする、戦争の写真などの展示館をなくさない
- ・差別をしたりしないため外国の文化などに触れたり、それぞれの個性を認め合う
- ・クラスなどの小さなところから手を出さなかったり個性を認めたりすることを意識する

〈自分にできること〉

- ・自分が知っていることから、家族などに戦争のことを伝えていく。
- ・戦争のことをもっと知る。
- ・争いをやめるために自分のやることは正しいか、正しくないかをしっかり考えて行動をする。
- ・少しでも自分の行動を振り返りいいことかを考える。

・喧嘩や揉め事はせず口で解決

3. 成果と課題

はじめ子どもたちは、戦争に対して「日本で遠い昔におこなわれていたこと」「今はほかの国同士で起きていること」などの漠然としたイメージをもっていた。しかし、戦争が起きた背景や経緯について知り、市内の軍事施設の写真を見たり、当時の空襲のようす、生活のようすを学習したりするなかで、戦争を身近なものとしてとらえ、戦争のない平和な暮らしを継続していくための使命が自分たちにもあるということを実感することができたのではないかと感じた。特に、市内に今も残っている軍事施設の写真や、軍事施設の跡地が学校や工場、商業施設になっているというような資料、この地域での空襲の被害など、地域をアツかつた教材は、子どもにとって身近に感じるものとなっていたように感じた。また、「今の自分が平和のためにできること」を考えることで、自分たちの行動が平和を維持していくことにつながるということ、未来の平和を実現するために何かできることを考えていくことの重要性に気づくこともできた。クラスのなかで起きているような小さなもめごとが戦争のような大きな争いにつながっていくのだろうと考えることができている子どももいた。自分で考えたことを実現できるように行動できるように意識させていきたいと思う。

しかし、本実践では、実際に戦争を体験した人の話を聞くことや、現地に赴き軍事施設跡や戦争遺跡を見る機会をつくることができなかった。今年度はそのような機会を設けていき、昨年度の学習だけで終わるのではなく、今後の学習活動やとりくみにつなげていきたい。

4. おわりに

今回の実践から、子どもたちに平和学習をおこなうことの大切さをあらためて感じる事ができた。さまざまな教科で学習内容が増えていき、平和教育の時間を十分に確保することはむずかしい。しかし今の平和を次世代へ継承していくために、子どもたちに平和教育をおこなっていくことはかせないことである。子どもたちが戦争の歴史やその影響を理解し、自分たちの未来に対する責任を感じられるようにしていかなければならない。教育の現場で平和の意義を伝えることは、単に知識を教えることではなく、未来を担う子どもたちに思考力や共感力を育むことでもある。平和教育を実践するなかで、次世代に平和の価値を伝えていくことが、わたしたち教員に課せられた責務であることを再認識することができた。今後もその実現にむけたとりくみを継続しておこなっていきたい。